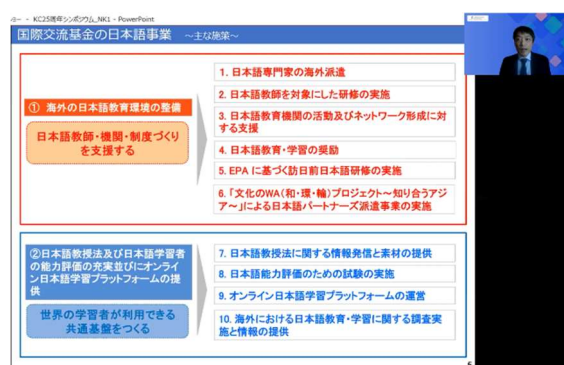


## 国際交流基金関西国際センター25周年記念シンポジウム「外国人材の受け入れ・共生のための日本語教育支援—海外での支援から国内へ—」報告

国際交流基金（JF）関西国際センターでは、設立25周年を記念して、2023年3月11日（土）にシンポジウム「外国人材の受け入れ・共生のための日本語教育支援—海外での支援から国内へ—」をオンラインで開催しました。当日は、国内の国際交流協会・地域日本語教室、日本語学校、大学、及び海外の日本語教育関係者など、各セッション約200名がご参加くださいました。（当日の動画及び投影した資料は、本ページ下部よりダウンロードいただけます。）

セッション1では、JFが2019年度から取り組んでいる外国人材向けの日本語教育支援の全体概要、国際交流基金日本語基礎テスト（JFT-Basic）、『いろいろ 生活の日本語』（『いろいろ』）、「いろいろ日本語オンラインコース」、現地日本語教師を対象とした研修、海外での日本語教育活動支援について各担当者・開発者が紹介しました。



（セッション1の様子～JFの日本語事業紹介～）

セッション2では、『いろいろ』「いろいろ日本語オンラインコース」の活用を考えることをテーマにワークショップを行いました。参加者はグループに分かれ、特に国内の日本語教育の現場でこれらのリソースをどのように活用できるかについて話し合いました。各グループでアイデアを出し合い、それを全体で共有した後に、『いろいろ』「いろいろ日本語オンラインコース」の開発担当者からいくつかのアイデアについてのコメントを得ました。



（セッション2の様子～Padletを用いたアイデアの共有～）

セッション3では、国内や地域の日本語教育において活用できる学習リソースのデモンストレーションを行いました。「文字」「継続学習」「ストラテジー」「看護介護」「ポータル」「文化庁」の

6つのルームを設定し、開発に関わった各ルームの担当者が20分のデモンストレーションを3回行い、参加者と直接意見交換を行いました。

The screenshot shows a virtual meeting interface with six rooms and a schedule. The rooms are arranged in a 2x3 grid:

- Rm.1 文字**: かなや漢字をインタラクティブに学習できるオンラインコースやアプリ
- Rm.2 継続学習**: 『いろどり』の次に学ぶ『まるごと日本語』オンラインコース(A2B1)
- Rm.3 ストラテジー**: コミュニケーションに役立つストラテジーを学ぶ『ひきたすにはんこ』
- Rm.4 看護介護**: 看護や介護の仕事をする人達をサポートするサイト『日本語でケアナビ』
- Rm.5 ポータル**: 多様なニーズに合わせてリソースを巡るポータルサイト『屏にはんこeラーニングみなと』『NIHONGO eな』
- Rm.6 文化庁**: 日本語学習サイト『つながるひろがるにほんごでくらし』

Below the rooms, there is a yellow callout box with the text: "プレクアウトルームへの移動の際は、ビデオ・マイクOFFをお願いします。"

The schedule is listed below the rooms:

- デモンストレーション1回目 14:25-14:45
- デモンストレーション2回目 14:48-15:08
- デモンストレーション3回目 15:10-15:30

(セッション3の様子～6つのルームの紹介～)

セッション4のパネルディスカッションでは、「海外の外国人材向け日本語教育支援から、国内の日本語教育への活用について考える」をテーマに、学習院大学文学部日本語日本文学科教授の金田智子氏、昭和女子大学人間文化学部日本語日本文学科教授の近藤彩氏、文化庁国語課長の圓入由美氏、文化庁国語課地域日本語教育推進室専門職の北村祐人氏の4名に国際交流基金日本語第2事業部の山本雅子部長が加わってパネルディスカッションを行いました。

まず、各パネリストの専門分野の観点から、国内における外国人受け入れ、共生のための日本語教育支援の現状や取り組み、課題などをご紹介いただきました。その中の「さまざまなリソースが出てきているが、多様な対象者に合わせて教師がどう活用するか」という共通のポイントから、「リソース」「教師（支援者）」という二つのキーワードに関連したディスカッションを行いました。リソースの国内での相互補完的活用について、金田氏から「日本語教師の持つべき力として、各リソースの目的や意図を見定めてうまく組み合わせていく力を研修で養成・育成していくべき」とのご指摘をいただきました。教師が新しい理念を理解、認知することについては、山本部長から「教師研修と良いリソースを作ることはセットで大事である」こと、金田氏からは「理念は、時間をかけて考えアクティブにやりとりしながらやっていくことによって、具体的なものと結び付けながら自身に落とし込むことは可能」とのコメントがありました。また圓入氏からは、文化庁の「日本語教育の参照枠」に基づくカリキュラム開発普及事業や日本語教師の養成及び現職日本語教師の研修事業の紹介があったほか、近藤氏からは、就労分野でも「リソース開発と研修はセットで考えている。外国人学習者の研修も必要だが、日本人が外国人と一緒に学ぶ場を設けることも大事」との示唆をいただきました。海外から国内への連携に関しては、山本部長から「国内と海外の日本語教育の現場はつながっており、連携が必要。さまざまなリソースを使って学習者が成功体験を積み重ねることが大事だが、その成功体験は国内外で相互に参照可能である」こと、北村氏からは「文化庁は国内、JFは海外が中心だが、インターネットが普及し海外向けの教材を国内でも使用することは現場にとっては有益であるため、これからも連携を進めていきたい」とのコメントがありました。



(セッション4の様子)

シンポジウム後、125名がアンケートにご回答くださり（3月13日時点）、うち93%の方より今回のシンポジウムの内容に対して「満足」との回答が寄せられました。「多文化共生を意識して今後日本語学習を支援する際に役立つ内容が網羅されていたと感じる」、「『いろどり』について非常に多様な教材や学習方法が準備されていることがよくわかった。国内の地域の遠隔地教育でも自律学習に結びつけることが可能と思った。また、国際交流基金が教員研修などを通じ、海外と国内へ移動する学習者をシームレスに支援できるよう活動していることもよくわかった」、「(ワークショップで)初めてお会いする方と意見交換ができたことと、Padletにたくさんのアイデアを共有していただいたことが大収穫だった」、「リソースは知っていても、なかなか試せる機会もないものも多かったので、デモンストレーションがあったのは大変良かった。敷居が下がった」、「セッション4にてパネリストの先生方のご意見を聞いて、教材に表面的に使われるのではなく、その教材の理念なども含めたポイントを意識してから使いたい、と考えさせられた」などのコメントがありました。

本シンポジウムでは、パネリストの皆様、参加者の皆様から、海外での支援から国内の日本語教育への活用について、様々な貴重なご意見、ご示唆をいただくことができました。改めて感謝申し上げます。海外と国内の日本語教育が円滑につながり、外国の方々が来日後も安心して日本での生活や就労ができるように、日本語教育の側面から各方面と連携して取り組みを進めるうえで大変参考になりました。本シンポジウムの議論を国際交流基金の今後の取り組みにも生かしていきたいと思っております。